
霊幻彼氏

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊幻彼氏

【Nコード】

N8925Z

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

クリスマスイブに恵理が電話で呼び出した元カレ、孝之。イケてる外見に合わず頑固で一途だった孝之を10年前に捨てたのは自分だった。

イブの夜に孝之と再会し夜を共にした恵理は、別れた事を後悔するが、時既に遅し。

孝之は3年前に死んでいたのだった。

前に書きました短編『クリスマス・イブ』の続編です。

1（前書き）

季節限定で書きました短編『クリスマス・プレゼント』の続編です。
宜しければ、そちらもご覧下さいませ。

「いらつしゃいませ〜！恋人にチョコレートはいかがですか〜！？」

時は寒さ本番の1月末。

地元の百貨店の入り口で、あたしは寒さに震えながらワゴンに入ったチョコレートを売りつけようと、声を枯らしていた。

たった2ヶ月前まで大阪で出版社に勤務していたあたしが、何故、田舎の百貨店でバレンタイン商戦のアルバイトをしているのか。

答えは簡単。

会社が倒産したからだ。

結局、あたしは仕事が失業した今、大阪で一人暮らしをしている理由がなくなつて、実家に帰ってきてしまったのだ。

失業保険が出ている間は、定職に就く訳にはいけないので、こうやってスポット的なアルバイトを職安で斡旋してもらっては日当を稼いでいる毎日だった。

今までの貯金があるのと、実家にいるのとで、差し迫って生活費に困るわけではないが、35歳の独身女性がいつまでもこの状況ではマズイと自覚はしていた。

だからと言って、この年になっていきなり正社員の仕事は見つかる筈もない。

今の所は就職活動をしながらか遊んでいるよりはマシなこのアルバイトを2月14日まで入れてしまったのだった。

「松本さん、メチャクチャ寒いですね〜！あたし、もう凍え死ぬかも〜」

一緒にバイトに入っている女子大生の鈴木裕香ちゃんすずきゆつかがガタガタ震

えながら、手を擦り合わせて泣き声を上げた。

「頑張るのよ！今日は6時まででいいって、チーフも言ってたし」

「えゝ、まだ3時なのですかゝ？まだ3時間もここにいろって事ゝゝゝつか、バレンタインまでまだ2週間もあるのに、売れるわけないですよゝ」

「売れないと思うけど、他の店が売り始めてる以上、やらない訳にはいかないんでしょ。そのお陰で雇ってもらってるんだから、文句言えないじゃない」

「そりゃゝそゝですけどゝゝゝ外でやる必要は全くないですよねゝゝ」

それにはあたしも同感だった。

ただでさえ風の強い海沿いのこの街で、真冬に外でチョコレートを売るなんて狂気の沙汰だ。

激安家電店にいるネット回線会社のキャッチ部隊のような、ペラペラのウィンドブレーカーが制服として配給されているが、この強風の中ではあまり意味をなしていない。

道行く客も、ワゴンの中をチラリと一瞥するだけで、さつさと歩き去っていく。

何時間もここに立っているのに、あたしから買ってくれた男性はまだ一人しかいなかった。

思い出すのも困難な冴えない風貌の中年男だったが、あたしがあまりにしつこく押し付けたものだから、同情で買ってくれたようなものだ。

あたし達は、あたかも『マッチ売りの少女』のように、「チョコはいりませんかゝ」とか細い声で叫び続けた。

長い間、一人暮らしたったあたしが、この街に戻ってきたのには、

ちょっとした理由があった。

収入が無くなって生活できなくなったのは勿論なのだが、クリスマスに起こった不思議な体験が、あたしをこの街に留まらせていた。

クリスマスイブの夜、コタツの中で酒を飲んで酔っ払っていたあたしは、突然、10年前に別れた（厳密に言えばあたしが捨てた）元カレ、井沢孝之^{いざわたかゆき}に電話する事を思いついた。

10年も前のケータイ番号がまさか繋がるとは思っていなかったのだが、何と孝之は電話に出た。

その時、家に誰もいなかったのをいいことに、あたしは彼を呼び出し、話をして、そして10年ぶりに体を重ねた。

問題はその後だった。

彼に再び逢おうと目論んで出かけた同窓会で、孝之は3年前に交通事故で死んでいる事を聞かされたのだ。

悲しむどころではなかった。

驚きのあまり、あたしは只々、呆然としていた。

あれは幽霊だったのか。

もしくは、酔っ払ったあたしが見ていた夢だったのか・・・。

でも、あたしは確かに彼とやる事はやった。

彼の滑らかな筋肉質の肌の感触まで、まだはつきりと思い出せる。

真相は分からないまま、あたしは何度も彼に再会しようとケータイに電話を試してみた。

だが、一度は繋がった筈のケータイからは、「お掛けになった電話番号は現在使われておりません」という、お馴染みのアナウンスが流れるのみだった。

それから、彼の事が気になって、あたしは仕事が決まるまでは、彼が生きていたこの街に留まる決意をした。

何故って・・・。

あたしは気付いてしまったのだ。

彼と別れて後悔していた事を・・・。

天然の茶髪に色素の薄い琥珀色の瞳。

陸上部で鍛えた長い筋肉質の手足。

スラリとした長身は完全にモデル体型で、遠くからでも人目を引いた。

そんなイケメンをあたしは10年前、つまり25才に時にフツてしまったのだ。

彼はチャライ外見に似合わず、真面目で几帳面で、しかも口が悪くて、乱暴で、融通が利かなかった。

昭和のオヤジかというくらい、頑固一徹、そして、優しい人だったのだ。

そして、あたしは彼に反して、いい加減で移り気で、所謂、八方美人な人間だった。

今、思えば、相反するあたし達だったから、お互い好きになったのかもしれない。

人は自分がないものを求めるのだから。

でも、一途な彼は、時にあたしを束縛した。

まだ、若さを持て余していたあたしは、彼とこの街で一生を終える事は考えられなくて、彼が結婚を口にし出した時、別れを告げたのだ。

結婚ってホントにタイミングの問題なんだと思う。

今、35歳で切羽詰ってるあたしなら、二つ返事でOKしただろうに。

今更、後悔しても遅過ぎる。

何と言っても、彼は3年前にもう死んでいるのだ。

あのクリスマスイブの不思議体験は、神様がくれたトキメキのプレゼントだったんだろう。

でなければ、実はあたしを恨んでる孝之の幽霊だ。

どちらでもいい。

あたしはもう少しの間、彼との思い出が残るこの街に留まりたかった。

「ねえ、松本さん、幽霊って信じます〜!？」

ぼんやりと孝之の事を回想していたあたしは、突然、タイムリーな質問をされて飛び上がった。

まさか、あたしが霊の事を考えていたとは思わない裕香ちゃんが、ワゴンの反対側から手に息をハーハー掛けながらこっちを見ている。

「な、なんで!？ヘンな事言わないでよ。気持ち悪いじゃん」

「でしょ〜!？でも、この百貨店の裏に商店街のアーケードがあるじゃないですか。そこに怪しげなカフェができたんですよ。占いカフェって言って、死んだ人ともお話させてくれるんだって。メチャ、胡散臭くないですか?」

・・・胡散臭い。

でも、その時、藁をも掴む心境だったあたしの胸はドキン!と鳴ったのだ。

女ってホントにバカだと思う。

占いとか、おまじないとか、幽霊とか、科学的根拠がないものに何故、惹かれてしまうのだろうか。

最近流行らしい天然石の数珠を何重にも腕に巻きつけてる女性客。

朝「今日の占い」をテレビで見て、「最下位は乙女座のアナタ」と言われてマジへこんでるあたしの母親。

かく言うあたしも「今日のラッキーアイテムはピンク！」と聞いたら、ピンクのハンカチを持っていたってしまう。

幽霊もまたしかり。

イケメンだったにも拘らず、一途過ぎる性格がウザイと思っていた孝之が、死んだ途端に美しい思い出になる。

幽霊になったと思った途端に、神聖視してしまうのだろうか。

実を言えば、孝之に再会する為、恐山まで行ってイタコに降霊してもらった事まで考えていたのだ。

それが、ここから500m離れたアーケード内の占いカフェで、コーヒー飲みながら、霊と話せる。

サファリパークじゃないんだから、あちこちに霊がウロウロしている訳ではないだろうが、青森県まで行く手間暇を考えたら、ずっと効率的だ。

嘘だったとしても、コーヒー飲んで帰ってくればいいんだから、スタバに行くよりは有意義だろう。

行っても損はなさそうだ。

そう考えて、あたしはバイトが終わったその夜、裕香ちゃんと占いカフェ「ロザリオ」のドアを叩いたのだ。

占いカフェ「ロザリオ」と書かれたアンティークな雰囲気の木製の看板が、同じく重厚な木製のドアに掛かったまま、風に煽られ、ガツタン、ガツタン音を立てている。

外壁だけ、と言うより見える部分だけレンガが張ってある戸にはワザとらしく蔦が絡まっていて、年季が入っているように演出されている。

最近、オープンしたばかりなのに、蔦が絡まるとは、自作自演も甚だしい。

しかも、アンティークなのはその店だけで、右隣は自転車屋、左隣は乾物屋という昭和の趣だ。

あたし達は並んで、アンバランスな和洋折衷の雰囲気のドアを開けた。

中は薄暗くて、光源が全く入らないように、にカーテンが引かれている。

オルゴールミュージックが静かに鳴っていて、キャンドルライトにボンヤリと照らされた店内は幻想的な雰囲気だ。

壁に建て付けられた棚の上には、かわいいコーヒーカップや、ガラスのグラスがズラリと並んで、耐震対策は全く考えられていない。

入り口付近に丸テーブルが二つ、そして半円形のカウンターが中央にドンとあって、その周りを囲むように椅子が並んでいる。

その構造から、この店の前はスナックだった事が窺える。

カウンターの中央には、一人の男性が立っていた。

少女マンガでよく見る執事のような服装に、髪をオールバックにしている。

シャープな輪郭に東洋的な切れ長の目。

間違いなく、執事をイメージしたコスプレだ。

イケメンの部類に入るのは間違いなくて、イタコさんよりは目の保養になるかもしれない。

「お帰りなさいませ、お嬢様方」

執事はニツコリ笑ってそう言う優雅な仕草で、カウンターの前に並んだ椅子に手を差し出した。

ここに座れという事らしい。

「やっただあ！ここって執事カフェでしたっけ？お嬢様って、なんかウケルんですけど」

さすが女子大生。

若さの力で順応してしまった裕香ちゃんが、キャピキャピしながらあかしを残して椅子に座った。

あたしも慌ててその後を追いつ、彼女の隣に腰掛けた。

「執事もしますが、勿論、占いもできますよ。こう言つと喜んで下さる女性が多いので、挨拶代わりに言うようにしてます。お飲み物は何になさいますか？」

そつのない笑顔で、彼は笑うと差別しないように、あたしにも問いかけてくれた。

少し高めの良く通る声。

その声と凜とした清楚な佇まいに、教会の牧師さんみたいな印象を受ける。

「あ、じゃあ、カフェオレをお願いします。」

「えー！松本さん、飲みましょうよお。ねえ、ここ、アルコールもあるんでしょ？」

「ございますよ。お車でなければ」

・・・車で来てるし。

そう思ったけど、このお気楽大学生は帰りの事など考えてもないようだ。

大方、あたしに送らせるつもりなんだろうけど。

結局、あたしにはカフェオレ、裕香ちゃんにはカクテルを執事は用意した。

「今日は占いを御所望ですか、お嬢様方？」

コーヒーカップを口にしながら、まだ店内をキョロキョロしているあたし達に執事は声を掛ける。

そうだ、本命はそれだった。

イケメンを至近距離で見ただけでも今日の収穫は大きかったけど、あくまで目的は孝之だ。

あたしがオズオズと口を開こうとしたその時、横から裕香ちゃんが

先に口を挟んだ。

「あたし、彼氏欲しいんですけど、どうやったらできますかあ
？」

・・・んな事、自分で考えろっつーの！

思わず出そうになったツツコミを、あたしは必死で胸に収める。
彼女だって、それなりに必死なことには違いない。
あたしより、時間的に余裕があるだけで。

執事はニツコリと笑いながら、ボードの上に置いてあるソフトボー
ルくらいの水晶玉をカウンターに持ってきた。

小さな赤い座布団の上に載った透明無地の球はあたしが顔を寄せる
と微妙に色を変える。

神秘アイテムナンバーワンだ。

彼は白い長い指で水晶球の周りにクルクル円を描いた。

そして、裕香ちゃんの顔とその反射した影の歪み具合を見比べて、
「今年、運命の出会いがあります」と自信有り気に答えた。

「えー！っそれって、もしかして、店長さんの事じゃないですか
！？今日って運命の日！？店長さんっておいくっ？」

「あなたより年上なのは確かですね。僕はもう若くないですよ、お
嬢様。」

彼は軽く裕香ちゃんをあしらうと、あたしに向かってウィンクした。

・・・そのウィンク、どういう意味だ！？
あたしと同類なのをアピールしたいのか！？

複雑な気分で、あたしはカフェオレを啜る。

彼はあたしをしばらく眺めていた。

イケメンの悩ましげな視線が痛くて、あたしは思わず赤面して上目遣いに彼を睨む。

「・・・なんですか？あたしの顔に何かついてます？」

「・・・はい、あなたには霊がついてますよ。それもかなり強い、ね」

「・・・え！？」

あたしを見つめていたと思っていた執事の視線は、あたしを通り越して何もない壁を睨んでいる。

あたかも、あたしの後ろに誰かがいるように。

あたしは、見えないものを見ている執事の視線の先を、恐る恐る振り返った。

「やったああ！何ソレ！？松本さん、憑り付かれてるんですかあ？」

カクテルを吹き出しながら、「冗談かと思った裕香ちゃんが茶化して叫んだ。

あたしも思わず、後ろを振り返ってキョロキョロ見回す。

勿論、そこにいるのは孝之じゃないのかって思ったからだ。

執事はジッと何もない壁を睨んで続けた。

「その霊はあなたに強い恨みを持っています。男性です。かなり強い霊力だ……。このままでは、あなたに霊障が起る……。あなた、早くこの土地を離れた方がいいですよ……。」

「ええ〜！あたし、失業して年末にこっちに来たばかりなんですけど！？」

「そんな事より、命が大事でしょう？できるだけ早く引越すべきです……。一度、御被いした方がいいかもしれませんね。今、ここで予約されれば20%オフにしますが……？」

「は！？20%オフって、御被いの代金！？」

「勿論、こちらでも商売ですから。御被いの通常価格3万円ですが、今回は初回キャンペーンも同時に使えます。最大30%オフ！これはお得ですよ。」

「松本さん！やったほうがいいですよ〜！男運悪いのも直るかも〜」

ふざけんな！と言いかけた所に、裕香ちゃんまでが合いの手を入れ

る。

キレたあたしはカバンを掴んで立ち上がった。

「結構です！そんなのインチキに決まってるじゃない。靈感商法もいいとこだわ！もう帰ります！お勘定は！？」

「はい、カフェオレ800円になります。」

カフェオレが800円！？

ラーメン食べた方がマシじゃん！？

にこやかに返事をする執事に、あたしは更に噛み付いた。

「ちょっと！なんでカフェオレが800円なの！？スタバより高いじゃん！つか、ラーメン食べれるし！」

「テールチャージが含まれておりますので、若干高めの設定になっております。霊視の料金は今回はサービスさせて頂いておりますよ。」

「何が霊視よ！信じられない！もういいわよ！釣りはいらなから！」

あたしは1000円札をバン！とカウンターの上に置いて、荒々しく店を出た。

憤慨しながら家に辿り着いたあたしは、まずはお清めとばかりにバスルームに直行した。

シャワールの蛇口を捻って、お湯を頭から滝のように浴びる。修行僧の如く、あたしはしばしシャワーに打たれていた。

ムカツク！

ムカツクったらムカツク！

どーしてあたしが孝之に恨まれなきゃなんないのよ。

そりゃ、付き合ってた時はないがしろにしてきたし、あまり尽くすタイプの彼女じゃなかったかもしれない。

でも、高校の時から付き合い始めて、別れるまで8年も一緒にいたんだもん。

付き合い長すぎて、夫婦のような馴れ合いの関係だったから、遠慮なく好きな事言ってたかもしれない。

結局、長過ぎた春が倦怠期と重なって、刺激が欲しくなったあたしが別れを切り出したんだけど。

孝之はもしかして、死んでも死に切れない程、あたしの事恨んでたのかなあ……。

だったら、あのクリスマスイブの事はやっぱりあたしの夢だったんだろうか。

熱いシャワーを浴びながら、あたしの目から涙がポロポロ零れてきた。

さっきのイケメン占い師は、あたしからふんだくる為に、見えてもないクセにテキトーな事を言ったのかもしれない。

でも、心当たりがあるあたしには、その言葉が重く押し掛かってきた。

・・・また、会いたい。

本当は怒ってるの？って、聞いてみたい。

もし恨んでるなら、一言、ゴメンネって言いたい。

そうでなければ、あたしだって死んでも死に切れない。

そう思ったあたしは、タオルを掴んで、バスルームから飛び出した。

「えーっと、ビールと安物のワインと、確かスルメイカがあったっけ……。そして、コタツの上には蜜柑……。と。」

自分の部屋に戻ったあたしは、記憶の糸を手繰り寄せながら、あのクリスマス夜の夜を再現しようと試みていた。

そう、確か、テレビを一人で見ながら、ビール飲んで酔っ払ってて……。

その後、ケータイから電話したんだっけ。

テレビをつけて、スルメイカを齧りながら、あたしは缶ビールを開けて一気に飲み干した。

酔い加減はこのくらいだったかな……。？

いや、あの時はもっと飲んでたかも。

そもそもが酔っていたので、当時の記憶は更に曖昧なものになっていた。

記憶を手繰りながら、あたしは景気付けに更にビールを開ける。

そして3本くらい飲み干した後、ようやく眩暈を感じたあたしは、コタツに入ったままゴロンと仰向けになった。

そうだ、ケータイ、ケータイ……。

お願い、電話に出て、孝之……。

あたしは酔いで震える手にケータイを握って、アドレスをスクロー

ルした。

まだ消えていない井沢孝之の名前。
ドキドキしながら、あたしが発信ボタンを押そうとしたその時。

パン！

大きな破裂音がして、突然、部屋の電気が消えた。

一瞬にして暗闇となったあたしの目の前で、ケータイ画面だけが光源になって、何とか周りが見える状態だ。

さっきまで付けていたテレビも同時に消えてしまったので、部屋は静寂に包まれる。

ブレーカーが落ちたんだろうか・・・？

あたしが酔いの回った体を起こそうとしたその時、体の動きが突然奪われた。

何かに押さえつけられているような、体の上にモノが載っているような、すごい重圧感だ。

あたしは仰向けのまま床にベタッと押し付けられた。

こ、これって・・・噂の金縛り・・・？

動かない体の中で唯一動いた目をキョロキョロさせて、あたしは部屋を見回す。

誰もいない筈の小さなあたしの部屋。

部屋の隅に置いてあるシングルベッドの上に、あたしは信じられないものを見た。

両足を抱えて座っている人があたしを睨んでいる。

暗い影のようなその人は、シルエットから男性である事が分かった。あたしと視線が合うと、その影はゆっくり立ち上がり、こちらにスーッと向かってくる。

歩いている感じはない。

足にローラースケートがついているように、ブレる事なく影は真っ直ぐあたしの方に近付いてきた。

・・・だ、誰！？孝之なの！？孝之！？

影はあたしの体の上までスーッと載ってくると、首に手をかけた。覆い被さってくるその影の顔を、あたしは硬直したまま凝視するが、誰かという判別ができない。

怖いのに視線を逸らすことも適わなかった。

「・・・！！！！」

首に掛かる手があたしの首をグッと締め付け、あたしは息を呑む。

恐怖と酸欠で抵抗する事ができない。

目の前がゆっくりと暗くなっていて、あたしは、そのまま意識を手放した。

「松本さん、ひどいですよ。昨日、あたし、飲んじやったから一人でタクシーで帰ったんですよ。もう、何で急に帰っちゃったんですか？」

二日酔いの頭に、ノリノリ女子大生の甘ったるい声は脳味噌をえぐられるようだ。

蛍光ピンクのウィンドブレーカーに身を包んだあたしは、百貨店の前のワゴンの前で道行く人々をボンヤリ眺めていた。

昨夜の恐怖の心霊体験のせいで、仕事するという心境では全くなかったが、バレンタインまで後2週間を切っている。

今日休んだら、会社もバイトを補充するのが大変だろう。

そう思つて、悪夢の一夜が明けてから、あたしは取り合えず外傷が無い事を確認した。

二日酔いの体に「ウコンの力」を注入して、何とかバイトに来たのだ。

社会人生活が長いと、会社の都合まで考えてしまふ、我ながら殊勝な心意気だ。

それに免じて正規採用にしてくれば、もっといいのだけど。

「当り前でしょ！？あの店、絶対怪しいし。なんだかんだ言つて、御被い代やら、壺やら、数珠やら、売りつける気なのよ。大体、何であたしが霊の恨みを買わなきゃなんない訳？」

ワゴンを挟んだ反対側にいる裕香ちゃんに、あたしは反撃する。

そうだ、霊（しかも男の！）に恨みを買う覚えなどない。

あるとすれば、生前、邪険に扱ってきた孝之くらいだけど、昨夜のあの影が孝之だったのかどうかは確信がなかった。

・・・孝之というよりは、そう・・・。
もっと暗くて地味な感じの、執念深い人・・・。

そこまで考えて、あたしは金縛りや首を絞められた感触を思い出してゾッと鳥肌が立った。

「でもお、あのイケメン占い師の人、霊が見えるんですって。それに、松本さんが男の人に恨みを買ったの、あたしは分かる気するなあ」

ニヤニヤしながら、裕香ちゃんは聞き捨てならない事をのたまう。
あたしは目を剥いて、ワゴンの後ろの彼女を睨みつけた。

「それ、どーゆー意味よ！？何で、あたしが男の恨み買うの！？」
「だってえ、松本さん、天然じゃないですかあ。結構かわいいのに、鈍いっていうかあ。思わせ振りの態度をしないとから、そんな気ありませんでした、みたいな？勘違いさせちゃう罪な女って感じですかね」

「いつ、あたしが思わせ振りの態度したのよ？」
「だから、松本さんは無意識にそういうのやっちゃうんですよ。だから、男は勝手に勘違いして、自滅するんです。」

あたしは、考え込んでしまった。

自分が八方美人でいい加減な性格なのは自覚していたので、裕香ちゃんの言葉にも思い当たるフシがない事もない。

ただ、生きてる男ならともかく、霊に恨みを買うほどではないと思う。

「でもお、これっていい意味ですよ」。松本さんの近くって、なん

か暖かくて、明るい感じがするんですよ。非モテ男は、明かりに群がる蛾みたいに吸い寄せられちゃうんじゃないのかな」

取り繕うつもりなのか、裕香ちゃんは褒めてるのか、貶してるのか微妙なコメントをする。

その気持ちはありがたいけど、生憎、非モテ男もモテ男も、あたしの周りには飛んで来る気配がない。

・・・もう一度、あの店に行ってみよう。

インチキ占い師を信じていた訳では全くない。

でも、昨夜の不思議体験を誰かに聞いて欲しくて、あたしは唐突にそう思った。

恨みどころか殺意まで感じた昨日のあの影。

あれは孝之じゃないって、誰かに言って貰いたかったのだ。

『占いカフェ ロザリオ』は昨日と同じように、自転車屋と乾物屋に挟まれてアンバランスなアンティークな雰囲気を出していた。今日は裕香ちゃんも合コンとかで、バイトが終わるとさっさと帰ってしまったものだから、あたしは一人で店の前に立ち尽くしていた。

月が出ているせいで、店の前はボンヤリと明るく、開店したばかりなのに古びた看板がはっきり見える。

その扉を見つめて、入ろうか、入らまいか、しばらく考えていた矢先、突然、中から扉がバーンと開いた。

「キャ！ごめんなさい！」

3人の制服姿の女子高生がキャピキャピ騒ぎながら、外に飛び出してきて、あたしは思わず後ずさる。

何の悩みもなさそうなテンションの高さだったけど、ここに来たという事は何か悩みがあるんだろう。

そうでなければ怖いもの見たさか、イケメン執事を観賞しに来たか。

あたしは、もう中に客がいないのを確認してから、恐る恐る足を踏み入れた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」

店内の正面に設置されたカウンターのの中で、昨日の執事はにこやかに声を掛けた。

昨日と同じオールバックにした艶のある黒髪に切れ長の目。

自分がイケてるのを自覚した上で、なんかの少女漫画に出てくる執事のコスプレしている。

よほどのナルシストか、そうでなければ、かなり残念なマンガオタクだ。

あたしは警戒しながら、そろりとカウンターの椅子にお尻を載せた。カフェオレ800円は仕方ないにしても、御被いをこのコスプレ執事をお願いする気はなかった。

たとえば、それが最大30%オフで、21000円に値下がりしても、だ。

そもそも、孝之に会いに来たのだから、被われては本末転倒というものだろう。

追い詰められた小動物みたいに固くなっているあたしを、執事は苦

笑して見つめた。

「そんなに怖がらなくても、僕は押し売りはしませんよ。昨日言った事、もし、気にしてらっしゃったら、申し訳ございません。ただ、僕は本当に見えてしまう体質なんです。」

「・・・本当なのは分かってます。あたし、昨日、霊に襲われたんです。金縛りにもあって・・・」

ああ・・・と何故か納得した顔で、執事は切れ長の目を細めた。

「では、あなたはまだ気が付いてなかったんですね。これは失礼しました。」

「・・・？何をですか？」

カウンターに頬杖ついているあたしの顔を見て、彼はにこやかに恐ろしい事を言った。

「あなたも僕と同じ、『見える』体質なんですよ。」

あたしに霊が見える！？

いや、見えてないけど。

そんなの今まで見た事ない。

見えるどころか、子供の頃、お盆にやってた「あなたの知らない世界」特集を見て、震え上がった側の人間だ。

見たとすれば、クリスマスイブに現われた孝之くらいだけど、あれは幽霊というには微妙な感じだ。

寧ろ、見えないから、こんなとこまで800円のカフェオレ飲む覚悟で来たんじゃない。

何を言われているのか分らず、あたしは眉間に皺寄せて執事を見た。

あたしの反応を見て、彼は可笑しそうに笑う。

「あなたはきっと人間か幽霊かの判別つかない位にハッキリ見えているんですよ。今まで会った人の中には、本物の霊もいたはずですよ。霊だと気が付かなかっただけで。会った人が実は亡くなってたなんて体験、今までありませんでしたか？」

「・・・あ、ある・・・かも」

それは、ある。

会ったところかエッチまでした、3年前から死んでる孝之の顔がすぐに頭に浮かんで、執事の言葉の意味をあたしはやっと理解した。

リアル過ぎたあのクリスマスイブの夜。

電話で呼び出し、エッチまでした孝之がまさか死んでるなんて夢にも思わなかった。

いや、寧ろ、夢だったんだと思っていた。

執事の言う事が本当なら、やっぱり孝之はリアルな幽霊だったのか・
・。

人間×幽霊の奇跡の異種交配は、靈感の強いあたしだから実現したケースなんだろうか？

「でも、昨日のあの心霊体験は！？アレ、完全に悪霊入ってたし！あたし、生まれて初めて金縛りとか体験しちゃったんですけど」

「それは、その霊があなたより強くて、意図的に攻撃してきたんでしょう。悪意のない浮幽霊は素通りしていきますからね。その場合、普通の人には見えない霊が、あなたにはハッキリ見え過ぎて、人が霊か区別がつかないんですよ。」

「・・・はあ。じゃ、昨日のはやっぱり、あたしを恨んでる孝之だったって事？」

「違うと思います。孝之さんが誰かは知りませんが、その霊は今、ここにいますから」

その言葉に、あたしはギョっとして執事の視線の先を見た。

鷹揚な口調とは裏腹に、カウンター越しに立っている執事表情は険しくなっていた。

筆で描いた様な眉の下の細められていた切れ長の目が鋭くなり、形のいい薄い唇がギュッと噛み締められる。

彼が見据えるその方向から、冷凍庫を開いた時のような冷気がスーッと漂ってくるのを肌で感じた。

尋常でない執事の形相と得体の知れない冷気に、あたしの背中がゾッと寒くなる。

「な、何ですか？執事さん、何、見てんのよ？」

「・・・昨日からあなたに憑いている霊ですよ。今、そこにいます。昨日は大人しくしてくれましたが、今日はそういう訳にもいかないみたいです。あなた、なんか男を泣かす事しました？」

「しつ失礼ね！人聞き悪い事言わないで下さい！泣かすどころか、最近、男の子と話なんてした事ありません。ナンパもされてません！」

「でも、あなたに弄ばれたって言ってますよ？」

「ブっ！な、何ですか、それ！？そんな事できたのは20代までです！30代になってからは、声も掛けてもらえません！」

あたし達が掛け合い漫才をしている間に、執事の視線の先の壁からうつすらと白い靄のようなものが湧き上がってきた。

靄は次第に濃くなり、煙のように立ち昇りながら、自らを形作っていく。

あたしは驚異の現象に口をあんぐり開けて、硬直していた。

やがて、白い煙は天井に向かって巻き上がると、そこには立ち尽くす一人の男性の姿が現われた。

小柄で小太りな眼鏡をかけた30代くらいの男だ。

「けいおん！」と書かれた萌え系アニメがプリントされているダサダサトレーナーは、ジーパンの中に入ってベルトで締められている。背中には何故かリュックを背負っていて、ウルトラマンのフィギアのストラップがジャラジャラぶら下っている。

髪はかなり後退しており、禿げ上がった額と背中に伸ばした長髪のせいで、まるで平家の落ち武者だ。

アキバとか大須とかの電気街に必ずいるこのタイプの男性。

あたしの友達には絶対にいないと断言できる。

でも、どこかで見たような……？

硬直している脳味噌をフル回転させて、あたしは必死に思い出そうと試みた。

その時、男の霊は俯いていた顔をゆっくりと上げた。

あたしを真つ直ぐに見つめる眼鏡の奥の瞳がギラリと光つて、ポテ
つとした丸い顔が歪んでニヤリと笑つた。

途端に、笑った唇の端からボタボタつと血が滴る。

「ひ、ひえええええ！！！」

あたしは恐ろしさのあまり、悲鳴を上げながらカウンターのの上に
登って、執事が立っている内側に飛び込んだ。

「執事さん！あ、あんな人、知り合いにいませんけど！？誰なの？
ってか、何、あの無駄にリアルなオタクスタイル！」

執事にしがみ付きながら、あたしはパニックになってキンキン声で叫んだ。

「僕が知る筈ないでしょう。でも、彼はあなたを知っていますよ。弄ばれたって怒ってますからね。」

執事は目の前で起った超現象に驚いた様子もなく、淡々と話をする一応、拝み屋やつてるんだから、こんなの見るのに慣れているんだろつか。

霊とは思えないリアルな動きで、オタク男はゆっくりと歩いてカウ
ンターの方に近付いて来る。

足は両方ついてて左右交互に動かししているが、足音は昨日と同じく

全くしない。

唇から滴る血だけがリアルティを持って、歩く度にポタツポタツと滴り落ちた。

「し、執事さん！御被いお願いします！通常料金3万円から30%オフで！支払いはバイトの給料日の25日でもいいですか！？もしくは失業保険の下りる来月15日で！ってか、早く何とかしてください！！！」

パニックになったあたしは支離滅裂な事を喚きながら、執事に抱きついてガクガクと揺さぶった。

なのに、彼は前を見つめたまま返事もしない。

「ちよつと！？執事さん、聞いてんの！？ねえってば・・・！？」

彼は返事をすることなく、揺さぶるあたしの力に押されるようにグラリと傾き、カウンターの下に崩れ落ちた。

「きゃあああ！ちよつとお！どーしちゃったの！？？」

びつくりしたあたしは、ぐったりと蹲るような姿勢で倒れている執事の背中に追い縋った。

その時を待っていたかのように、彼の両手があたしの両足をグッと掴んだ。

その勢いであたしはひっくり返され、カウンターの下で尻餅をつく。

「キャ！な、執事さん・・・！？」

そこまで言いかけて、あたしは息を吞んで手で口を押さえた。

蹲ってあたしの両足首を掴んだ執事の顔がゆっくりと上がる。

切れ長の目が大きく見開かれ、その唇から血がボタボタ滴り落ちる。

「オ・レ・ヲ・モ・テ・ア・ソ・ビ・ヤ・ガ・ッテ・・・」

さっきまでの執事のテノールとは全く別人の声が、その唇から発せられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925z/>

霊幻彼氏

2011年12月31日21時53分発行